小林義直とその訳書

渋谷　鉱、谷津　三雄

小林義直は弘化元年（一八四四）八月八日、備後国野上村（現広島県福山市）の農業、小林周蔵の長男として生まれ、幼名を辰太郎または達太郎と呼んだ。体が弱く、実家を次男に譲り、江木鈺水に漢学、寺地強平に蘭学を学び、漢洋双方の医学を修めた。とくに優秀性を買われ、江木氏の推薦で、当時士族でないと許可しなかった藩黌誠之館の試験を受けて入学。卒業後は福山地方における最初の洋医として開業した。当時藩は優秀者を江戸に留学させる方策をとっていたが、辰太郎はその優秀さをもって、文久三年十月十九日十九歳で藩命によって江戸に留学を許され、最初は私費であったが、後に藩士同格の待遇を受けた。江戸において洋書調所で西洋医学および蘭英の学を兼修、その翌年に藩命で苗字帯刀を許され、最上達太郎から小林達太郎と名乗った。その後、下総佐倉に遷り、佐藤尚中に学び、後に江戸に帰り、坪井芳洲に学び、明治の始め一度福山に帰り藩黌学句読教授の任にあったが、明治三年大学東校に召され、福山より上京し、准少助教になった頃より脳症を患い、頭痛の発作に苦しみ、翌四年二月十五日、大学少助教に昇進し、小林義直と改名、同年十二月二十四日文部大助教に昇進したが、病気のため辞任し、明治六年五月二十五日文部省出仕（翻訳課、医書編製専務）となったが再発し、明治八年一月十九日に辞任し、著作のかたわら、本郷区衛生係および東京地方衛生会委員を兼務すること数年で疾が治す。たまたま内務省衛生局長長与専斎が少しく事務をすることがむしろ休養に適するであろうとし、明治十三年五月二十九日、衛生局傭となり医事課に勤む。しかし同年七月に再発し、九月に辞し、その後は著述を主とし、明治三十八年八月六日、六十一歳で没す。

その間、『理礼氏薬理学』（明治五年春刊）、『華氏産科摘要』（明治九年二月二日版権免許）、『弗氏生理書』、『内科必携理学診断法』、『四民須知』、『解剖生理浅説』、『四民須知養生浅説』、『虎烈刺論』、『生理提要』、『小学校用養生浅説』、『リンゲル氏著薬性論』、『カットル氏生理養生論』、

『学校衛生論』、『ハクスレー氏人身生理学』、『解体図略説付幻燈使用法』、『百科全書化学編』、『近世化学示要』、『独乙国パライト氏撰著歯科提要』など多数の訳本がある。『歯科提要』は一九×一三㎝大、洋本で明治二十二年十二月三日出版（明治二十二年六月長与専斎の序文あり）、また長谷川泰（明治二十二年七月一日）の序に「君嘗傍観為、吾邦、歯科医之嚆矢、某氏施術、者歳余、而今有此譯」とあり、訳すのに某歯科医師の術式を見学したことがわかる。しかし訳述著誌に「予ハ此書ヲ訳スル前ニ本邦洋方歯科医ノ嚆矢小幡英之助君ニ請テ年余其施術ヲ傍観セシコトアルト訳成リテ医学士坪井次郎君ニ一閲ヲ括シ、君丁寧ニ之ヲ校閲セシト」（明治二十二年七月一日）とあることから、『歯科提要』の翻訳の努力と苦心のほどがわかるし、また、長谷川泰のいう某氏とは小幡英之助であることを知ることができるが、なぜ長谷川は某氏といったのであろうか。なお初刊本は巻上一九七頁、巻下一九八～四一三頁、合本全一冊、一円六〇銭であるが、再版の明治三十四年三月刊は巻上二五一頁、巻下二五二～五六六頁で一五三頁増となり、二円五〇銭で、しかも再版の誌に「意外ニ歯科医及ヒ歯科学生ノ愛読ヲ受ケ」とあることから、当時の歯科学生にもっとも多く読まれたことがわかる。とくに高山歯科医学院（現東京歯科大学の前身）の創立が明治二十三年一月であることをあわせ考えると、わが国の黎明期における歯科医学も、一般医学と同様にドイツ医学の影響の大なることを本書を通じて知ることができる。しかも再版の明治三十四年は小林義直の没四年前で晩年は本書に精魂を打ち込んだといっても過言ではなかろう。

とくに、井上角五郎編『小林先生小伝』明治三十九年六月発行の小冊子に「語学は蘭学より入りて英書に衛生局辞職後（すなわち明治十三年九月二十日）病間ドイツ語を攻む。其著訳歯科提要は之を実にドイツの原著によるという」と記されていることから『歯科提要』は病床にありながらの訳本であることを知ることができる。

（日本大学松戸歯学部）